Carpe diem

百武彩花

「Dum spiro, spero」息をすれば希望を持つ

『美しい日に自殺します』

そういう遺書もいいかもしれない、と思いながら奥田勇太は担任の木村の話を聞く。

「あー、そろそろ葉櫻の季節になったな。外の桜並木も新しい葉を出しているわけで、だから――、」

なんだか今日はぎこちない。慣れない話題だからだろうか。

木村は必ずホームルームを始める前に黒板にキーワードを書く。

それが話し始める合図だ。入学初日からホームルームのたびにやるものだから、自然と生徒も席につくようになった。いつもはスポーツの話題の見出しや、簡単なニュースの単語を書く。それが今日は季語だなんて。誰かに感化されたのが生徒側にも丸わかりだな、と勇太は思う。

それを抜きにしても、この話が伝えたいであろう感性的な美しさ、情緒的な何かは抜けて行ってしまっている気がした。

――原因が木村の話し方のせいか、下心のせいなのかは分からないけれど。

勇太はじっと前を見つめる。

視線は黒板に書かれた文字に注がれていた。

濃い緑色をした黒板に、鮮やかな白いチョークで書かれた『葉櫻の季節』。

美しい言葉だ。

男の担任が書いた割には女性的で流れるような筆跡

も、はざくらという語感も美しいと思った。わざわざ旧字を選んだ感性も勇太好みだった。

ルーズリーフを取り出し、文字を書き写す。勇太は外に視線を向けた。

真っ青の空に浮かぶ白い雲、ちらちらと舞う飛花、光に透けた新緑。黒板の文字、ノートの白いページ、走り書きの自分の字。

屋上から宙に飛ぶ、まっさらの制服に包まれた自分の身体。

悪くない、と勇太はシャーペンを置いた。

*

自分が社会には溶け込めていない、ということに気づいたのは中学生の時だった。

勇太は教師の言う普通の子とはズレているらしい。周りの男子たちのようにわかりやすく女子に興味を持つわけでもなく、漫画の主人公に憧れることもせず。かといって何かに打ち込むわけでもない。教師が求める、社会が決める中学生像には程遠かった。

一度だけ相談したことがある教師は「青春だなぁ。この時期はそんなもんだ」と片付けた。教師に心を許した分、落胆が大きかった。勇太自身の悩みを皆が悩んでるかのようにいう。「じゃあどうして皆は平気な顔をしてるんだ」と言ってやりたかった。

大人は青春という言葉に酔って、懐かしそうに自分の話をするばかりだ。

どうせ言ってもコイツらの感傷に使われるだけだ。

——俺には青春とやらもないのに。

そう思うと虚しさで、怒りでどうにかなりそうだった。

実際、普通ではないというのは人間関係を築く上でとても困った。

相手の思い描く返答ができないのだ。同世代のノリも理解できず、合わせて笑うことしかできない。

中三の頃、どうにかこうにか友達といえる数人グループに入れたことがあった。

わかりやすくバカをやって笑っていればいい。誰かと一緒に、ということを意識すれば馴染んでいられたのだ。だから高校受験でも仲間の一人と同じ普通科を選んだし、そいつの「やべぇ勉強してねぇ」という言葉に同調して笑っていられた。模試の平均的な点数を取っていれば余裕で合格判定をもらえていたからだ。ほかのクラスメイトの必死さに比べれば、勇太はゆったりとした受験生活を過ごしていた。

何もかも間違っていたと理解したのは合格発表の日だった。

直前の模試でもA判定で、試験も一問も解けない問題はなかった。特に緊張をすることもなく、当たり前のように自分の番号を確認した。もちろん合格だった。

少し離れたところには冷やかしに来ていた仲間もいて、一緒に受験したやつも真ん中で笑っていた。勇太もへらり、と笑いながら友人たちのところに駆け寄って「まあ、余裕だったよな」と一緒に受験した奴に声をかけた。

だけど、そこには想像していたような笑顔はなかった。

皆が一斉に真顔になって、真ん中で笑っていた彼は真っ青な顔でこっちを睨んだ。一瞬で理解する。どうやら彼は落ちたらしい。勇太の笑顔は凍り付いた。

何か声をかけようと脳みそと語彙をフル回転させる。

――駄目だ。

笑っていればいい。そう思って選んだ仲間なのに肝心なときにその笑顔が徒になる皮肉さと、やっぱり言葉が見つからず真っ白になる頭に勇太は思わず口角が上がる。自分でも嫌な笑顔だと思った。彼らは勇太をみて、気持ち悪がるように目配せをしあう。

なにか言葉を返してくれるだろうか。一縷の望みのように彼を見ると、後ずさるように身を引いていた。その体に仲間たちが手を回す。慰めるようにも、守るようにも見えた。そうして「なんだあいつ」「あんな奴、気にすんなよ」と勇太から逃げるように帰っていった。

勇太から遠のくにつれて、彼らはいつものように笑いだした。とっくに話題は別のものに切り替わっているのだろう。楽しそうな後ろ姿だった。

結局、勇太は仲間の頭数には入ってなかったのだ。

一人ぼっちで家に帰ってすぐに受験票を握りつぶした。スマホに入っていた仲間とのデータを全て消去した。手元に残ったのは、もう意味のなくなった合格通知だけ。

それが中学校での最後の思い出だった。

勇太はデータが消えるまでの間、脳裏に焼き付いた彼らの後ろ姿を振り払おうとした。

一瞬でも気を抜けば、あの瞬間の断片が刺さって心がひりついた。最悪な心境だった。泣きそうで、それでも涙を強がりで押し込め、人生で一番死にたいと思った。

でも――、

でも、彼らの遠ざかっていく映像が心をつかんで離さない。

初春の寒さも、さわやかな梅の香りと咲きかけた桜並木、降りしきる木漏れ日。周囲の人々の喧騒。その真ん中を横並びで肩をたたき合いながら帰っていく彼ら。べつに他の人からすれば普通の光景だったと思う。でも、勇太にとっては違った。

美しかった。
認めたくないくらい、自分にとっては美しかった。
それは勇太がなれなかった、完璧な青春の形だった。

その日から勇太は美しいということに傾倒し始めた。どうあがいても勇太は世界が望む美しい普通の人間にはなれない、――なることはできなかったから。
ある日、偶然読んだ太宰の小説に「美しさに内容なんてあってたまるか。美しさはいつも無意味で、無道徳だ」という一文を見つけた。思わず泣きそうになったのを覚えている。勇太は人間として調和がとれているわけじゃない。特別愛されるわけでもない。
だからせめて、美しく死にたい。
もしも美しさが無道徳ならば、自らの死だけが勇太に残された美しさだ。
それが勇太に残された青春だ。
あの日からずっと、それだけに縋って生きている。

「今日の木村、わかりやすかったよな」
ぎっ、と椅子を傾けて、前の席の長谷が話しかけてきた。勇太は耳からイヤホンを外しつつ、顔を上げる。やっとのことで四限目の数学をこなし、昼休みにスマホをつつきながら弁当を食べているところだった。

「何が」
勇太は唐揚げをほおばりながら答える。
「朝のホームルームは完全に川田ちゃんの受け売りだって」
「川田先生？」
「国語の川田ちゃんだよ。ぜーったい付き合ってるって！　川田ちゃんは聞いても全然相手にしてくれないけど、木村は見るからに浮かれてるって！」
隣の女子グループからも木村先生、というワードが聞こえてきた。どうやら今日の話題はそれで持ち切りらしい。木村先生に恋をしている女子が本気で落ち込んでいるようで、さっきから八つ当たりのような暴言が呪いのように飛び出してくる。
「確かに、朝の話題は珍しかったけどさ。情緒的なことあいつが一番わかってなさそうなのに」
「は？　ジョウチョってなに」
バカみたいな量の白米を口元に運びながら、長谷は首を傾げた。
「きれいとか、そんな感じのこと」
「ふぁーね」
そこで一度会話が途切れる。勇太はなんとなしに、しおれたレタスを箸でつついた。
彼は弁当の最後の一口をすくい上げ、炭酸系のジュー

スで流し込む。慌てたようにガチャガチャと弁当を包むと、勢いよく立ち上がった。

「じゃあ、俺、サッカーの約束あるから。行くわ」

勇太はひら、と手をあげる。長谷は土で汚れたショルダーバックを担いで、教室から飛び出していった。廊下のほうから友人の名前を呼ぶ声が聞こえる。いつものメンバーで試合をするようだ。

入学してから日も経っていないのに、よくそんなに友達作れるな。

食欲を満たされたところに春の陽を浴びて、ゆらゆらと眠気に襲われながら勇太は思う。しおれたレタスは残すことにして、手早く弁当を包んだ。少しだけ、と机に突っ伏して「あ、そうか」と声が漏れた。

中学から仲いいやつがいれば、そりゃ大勢とも仲良くなれるよな。

自分で仕掛けて、自分で踏んだ地雷だ。笑おうにもどうにも寂しくなって、勇太はイヤホンを耳に突っ込んだ。クラスの喧騒が少し遠くに感じる。どこにも居場所がないような、落ち着かない気持ちになって、腕に頭を預けたまま窓の外を見た。青空をツバメらしき影が横切っていった。吹き込んだ風に髪の毛がなびいて、隙間から光がチカチカと輝く。

春の澄んだ青空に誘われるように勇太はイヤホンを外した。

雄太はゆったりした足取りで教室を出る。荷物はすべて机の上に置き去りにした。

廊下で騒がしく歯磨きをする集団をよけつつ外階段の扉前にでると、空き教室のほうからバースデーソングが聞こえてきた。通り過ぎながら窓から覗いてみるとクラスメイトだ。学年の中で一足先に一歳上になるのってどんな気持ちなのだろう。勇太は足を止めた。

いやいや、俺も一足先に死ぬじゃん。

思わず、息がふっと漏れる。とんだブラックジョークだ。勇太はその吐息に押されるように扉を押し開けた。雨風のせいで汚れた階段を上履きで上がる。

めったに感じることのない感覚に、むずむずとする。悪いことをしている気分になってきた。勇太は夢中になって階段を一つずつ登っていく。じゃりじゃりとするゴム越しの感覚を楽しんでいると、いつの間にか一番上まで来てしまっていた。

「あれ、ここで終わりだったっけ」

勇太は足を止める。今まで登ってきた階段を振り返った。まるで喧騒から切り離されたように誰もいない。たった一枚、扉を開けただけなのに今まで気づかなかったなと勇太は手すりにもたれた。日差しで温もったアスファルトが心地よい。温かさに誘われるように目を閉じた。

――しばらくその体勢でいたからだろうか。
近くに蝶が止まって羽が揺れた。勇太が見とれていると、ふわっと髪がなびく。バタバタという音につられて下を見ると、窓際から一斉に白いカーテンが膨らんでいた。波のように木の葉が揺れて、かすかに残っていた桜の花が舞う。
――まさか、バタフライエフェクト？
文字通りの光景に、勇太は思わず笑みがこぼれる。
なんて、死ぬのにちょうどいい日なんだろう。
勇太は手すりから身を起こして屋上へと足を踏み入れた。

＊

学校としては自殺防止の対策をしっかりとしてあるものだと思っていたが、実際は勇太の身長より少し高いフェンスで周囲を囲ってあるのみだった。
もう一段高い校旗が掲揚されている場所に至ってはフェンスすらなかった。おまけに上に登るための梯子は開放されっぱなしだ。この学校、今まで死人が出てないのが奇跡なんじゃないだろうか。自殺者の身ながら、学校の甘い危機管理に勇太は心配になる。
まあ、屋上の縁に腰掛けながら心配することではないけどな。
勇太はやたらと広い青空を見上げた。
鍵穴式の南京錠も安全ピンを二つ使うだけで簡単に開いた。百度ほどに開き、針先を丸めたものを丸い穴に差し込んで抵抗を感じるまで倒す。あとは、まっすぐに伸ばしたピンを細い穴に入れ込んで内部の機構をうまく開放すればいい。今の時代、検索すればなんでも知識を得ることができるのだ。少しだけ恐ろしくなった。
そういうわけで、あとは勇太が立ち上がって一歩だけ踏み出せばよかった。グラウンドで遊ぶ生徒たちが随分と小さく見える。そろり、と首をかすかに動かすと真下に飛び込む予定のコンクリート地面が見えた。
怖くはない。強がりなどではなかった。
それよりも緊張が勝って、手汗がじっとりと滲んでいた。
どこかで同じ緊張を体験したことがあるような気がして、ああ、授業で当てられたときの感じだ。と勇太は手汗をぬぐった。
どこにでもある緊張感を、ちっとも特別ではない思いを死ぬ間際も感じる。その面白さが、まるで世界の秘密を知ったようだと勇太は思う。
自殺する間際で高揚しているのかもしれなかった。
遺書をどうしようか、と空を見上げる。手元にはルーズリーフもシャーペンもスマホもなかった。ちょっとト

イレに行っただけ、のような状態の机の上を思い出す。レタスを残したままの弁当箱や一行しか書いていないルーズリーフ、やりかけの数学のプリントも出したままで来てしまった。きっと今頃、笑い声の満ちる教室で風に吹かれている。

乱雑ながらも、教室の風景に違和感なく溶け込んでいるのだろう。

——それだけでいいや。

勇太はゆっくりと立ち上がった。

呼吸を整えて、息を止めた。自然と目も閉じていた。

これでもう美しさに焦がれることもなくなった。

憧れや理想に押しつぶされることもなくなった。

「青春」とやらに憧れるのも最後だ。

勇太は風の音を聴いた。

前を向いたときはもう落下しているものだと思って、つま先を浮かせる。

踏み出した足が空を踏みかけ——、

一瞬、足が止まった。

突然、背後から耳障りなギターの音がした。

その時鳴ったコードがいけなかったんだと思う。

勇太は思わず振り向いてしまった。どこにでも居そうな女子生徒が、勇太の立つ場所の影でギターを弾いていた。嫌に目立つ趣味の悪そうなショッキングピンクのストラップを付けたギターが音を奏でていた。

いつの間にそこにいたのか、相手は勇太には気づいていないようだった。

春の冷たい空気が身体の内側から染み込む。

気付けば呼吸をしていた。

グラウンドの方からも数人の大声が聞こえる。バレてしまったのかもしれない。他人に自殺を引き留められる、そんな美しくないお涙頂戴なんかクソ食らえだ。

勇太は視線だけを向けた。

——丁度、シュートが決まったらしかった。

もうめちゃくちゃに叫びたい衝動が吹き荒れた。

でもそんな度胸もなく、代わりに窒息するくらい息を吸いこんだ。これ以上吸えない。それくらいまで吸い込んで、溜息みたいに吐き出した。

微かな夏の匂いがやけに温かかった。正午の太陽の匂いが、自分の掻いた汗の匂いが、グラウンドの土埃の匂いがどうしようもなく愛おしく感じた。

また大きく胸が動いて呼吸をする。勇太も諦めて息を吸った。

――きっと明日も、と独り言ちる。
明日もダラダラと登校して、真っ白のままの課題にため息を吐いて、退屈な授業に眠気を覚え、間に合わせの他人と弁当を食って、楽しそうな周りに舌打ちを我慢して、一人ぼっちの自分の人生に嫌気が差す。
身体を包む暖かさにあくびが出た。ほんの少しだけ涙が滲む。
こぼれることもなく、いつの間にか消えた。
どこまでも美しくない現状に勇太は苦笑する。自然と足取りは梯子のほうへと向いた。ここを降りたら、もう二度と上がれない。そんな気もしたが勇太の足は止まらなかった。
全ては春の冷たさを溶かす、優しい初夏の匂いのせいだった。

「Nunc omnia rident」いまこの世のすべてが笑っている

夏も盛りを過ぎてそろそろ涼しくなってきた――、
と言いたいところだが、まだまだ残暑というには暑すぎる気温だ。節約という名目で昼休みは冷房の切られてしまう教室は地獄の様だった。教室のあちこちで下敷きを仰ぐ音が聞こえてくる。
「もう九月も終わりだよ！　暑すぎるよ！」
隣から聞こえてきた嘆き声に、白石日奈は小さく同意を返す。
九月も半ばを過ぎたというのに連日のように灼熱の暑さが続いている。異常気象だ、と騒ぐニュースも飽きるほど見た。最初の頃は「ヤバいよねー」と話題にもしていたが、ここまでくると話題にするのも嫌になってくる。笑いごとではないヤバさだ。
「あついあついあつい」
「うるさい……」
そんな中、元気に泣きごとを言うのは片山涼子。
先ほどからスカートを持ち上げては中に風を送り込んでいる。スカートを恥じらいもなにもなく、思いっきり持ち上げては降ろしていた。体操着のハーフパンツを着用しているためなのか、そこに一切の色気が含まれていないからか。教室の中だというのに誰の注目もなかった。あるのは余波でまき散らされる生ぬるい風だけだ。
「涼子、ダベってる暇あったらこっち手伝ってよ！」
足元の巨大な段ボールが喋る。――いや、クラスメイトが喋る。
「うえぇ……、やだよ。その中熱いもん」
「そこのペンキ持ってきて、黄色のやつ」

「山田！　それとってぇ」
その声に「うるせえ、自分でやれ」とやはり段ボールから声が飛んでくる。それにため息で返した涼子は、全身をひきずるように段ボールの山へと消えていった。
今、この学校は一週間後に控えた文化祭に向けて大忙しだ。

＊

この学校の文化祭、星玲祭（せいれいさい）は二日に分けて行われる。
一日目は学校、二日目は近くのホールを借りての盛大な文化祭だ。一日目は一、二年生の各クラスの展示、もしくは模擬店を学校で行う。もちろん部活動での展示やステージ発表もある。二日目はホールで三年生の合唱コンテストと吹奏楽部の演奏。
三年生は受験前の負担を減らそうという目的なのだろうが、勝負事を持ち出されると燃え上がらないわけがない。毎日、朝と放課後に外で歌っているようだ。
文化祭の準備期間は一か月間。一週間前になると五限と六限の授業も準備に回され、朝や放課後の時間もたっぷり使って酷使されている。
その中でも、グッと酷使度が上がるのが実行委員会だ。
クラスから男女一人ずつ選出される。なにもカリスマ性が必要なわけではないので、というよりクラスの人気者は夏の体育祭がメインなのだ。文化祭の委員は、仕事が捌ける人間であればいい。一か月前から毎日のように招集されては会議を開き、調整をとってクラスを仕切る。バカみたいな仕事量だ。まぁ、要は――
（都合のいい人、が選ばれやすいんだよね）
日奈は虚無をたたえた瞳で資料をめくる。実行委員が書き込まなければならない、まあまあの量の申請書たち。大人からすれば「何をそれほどのこと」と言われるかもしれない。
だが、高校生にとって申請書と名の付くものは全て敵だ。
「書きたくない、書きたくないよ――！」
「でた、また日奈が嘆いてる」
今度はどうした、とばかりに涼子が顔を出した。
「ボールペンで一発書きが死ぬほど嫌い。むり」
「あーね、それはむりだわ。今度は何書かなきゃいけないの？」
日奈は涼子にプリントを差し出す。
「借用申請書。何を借りるかを書きだして今日の会議で出さなきゃいけない」
「今日中？　相変わらず実行委員は大変だねぇ」
「あんたたちが選んどいてそれいう⁉」

噛みついた日奈を涼子がなだめる。周りも慰めるように笑った。
「いやー、まさかふざけて日奈の名前出しただけなのに選ばれるとはね」
「日奈もそこで諦めちゃうから」「フォローするって！」
自分が委員じゃないからと言いたい放題だ。
涼子は日奈の手を握った。
「五組のお化け屋敷は日奈にかかってる。クラス展示の投票で一位を取れればおごりで焼き肉よ。そうなれば、日奈には一番いいお肉あげるから」
「そればっかり……」
あれ、食べたくないの？　と涼子は首を傾げた。くそう。
「食べたいよ、ばか！！」
日奈が天井を仰いだ。
その瞬間、黒板側の扉が勢いよく開く。
「あの、白石いる？」
雑然と散らばる段ボールを見渡した彼は日奈を見つけると、にっこりと笑った。ただでさえ暑い教室の温度が少し上がる。段ボールから顔を出す女子も見受けられた。足元の段ボール内で髪の毛を溶かす友人の必死さといったら。思わず笑いが漏れる。
その笑顔を勘違いしたのかこっちに向かってきた。
涼子がこそこそと耳打ちする。
「成瀬くんじゃん。日奈こっちきてるよ」
「待って待って、さっきすごい顔で叫んだけど！」
成瀬悠希。一組の実行委員だ。そして委員会の例外、本物の人気者である。
普通科は成績優秀者が集められるクラスがある。一年の頃は入試での合計点数順に一組に集められ、二年の文理選択後は成績によって一組と七組に振り分けられる。定期テストのクラスの平均点が七〇点以上という化け物たち。成瀬は一年の頃から特進クラスだ。
それに加えて成瀬は身長が百八十センチ以上はある。身長が高い男子は三割増しでかっこよく見えるものだし、そもそも成瀬は顔がいい。さらに陸上部で鍛えた身体や焼けた肌とくれば文句なしだ。ほっとかれるわけがない。
徐々に近づいてきた成瀬に日奈は逃げ腰になった。
「白石、今日の放課後に時間ある？」
「あー、うん。あるけど、どうしたの？」
平静を装って返事を返す。
涼子は逃げるように作業に加わった。くそ、こんな時ばかり真面目なふりをしやがって。
「学校の暗幕を手入れしなきゃいけないんだけど人手が足りなくて。ほかの人にも聞いてみたけど忙しいみたい

……」

成瀬はこれ、とプリントを差し出した。

「うわ、一人で出来るわけないじゃん。誰よ指示出したやつ」

「小西。最悪だよ」

小西とは理科の先生だ。特進のクラスしか受け持たないし、バカはお嫌いのご様子なのか行事はいつも不機嫌だ。ヤツが頼んできたことはだいたい余計な事が多い。

案の定、しれっと書かれた『暗幕　十五枚』の文字に目を疑う。

「ばかなの？」「バカ嫌いのバカだよ」

成瀬もなかなか不満がたまっているようだ。

「わかった。いいよ」

「場所は教室棟の第二準備室だから」

日奈は頷くと「ありがとう」と成瀬が頭を軽く下げる。その姿勢でも頭が自分より上にあって少し驚いた。

「すごい、頭下げてもつむじが見えない……。また身長伸びたの？」

「うーん、少なくとも中学から五センチは伸びたはず。白石はまた縮んだ？」

じとり、とした目で成瀬を睨みつける。

「成瀬がひざ下五センチくらい分けてくれればいいのに」

「いいよ？　優秀な陸上選手の未来を奪うことになるけど」

それはまずい。女子と陸上部顧問に殺される。

意地が悪い、と言いかけた口が止まった。

「白石はそのままでいいよ」

流れるように頭の上に置かれた手を、日奈が認知する前に、

「じゃあ、またあとで」

成瀬は教室を去っていった。

唖然とする日奈を置いて。

「なにさっきの！　まって、日奈って中学からの知り合いなの？」

「王子かと思った……」「日奈！　ちょっとあんた頭貸しなさいよ！」

教室の熱気は最高潮だ。動物園のようなやかましさの中、日奈は呆然としつつ、

「あんた、私の頭でなにするつもりよ」

と、弱弱しい声で最低限の牽制をかけた。

初めて成瀬と出会ったのは中学三年の夏だった。

どうやっても志望校の合格点に届かない。その焦りから親に頼み込んで入れてもらった塾で同じクラスになった。志望校別でクラス分けされるらしい。県内の普通科

の中で三番目、という微妙な高校だったので生徒もピンからキリまでいる。部活にばかり打ち込んできた子。ある科目だけが足りていない子。模試を受けたい子。日奈は社会と英語がとにかくダメな子だった。

一方、成瀬は塾の近所に住んでいるらしく、一応通っているという感じだ。成績優秀な成瀬は一緒の授業は受けてはいるが、問題はすでに高校のものだったりしていた。別の中学に通っているため特に話すこともなかった。

まるで接点のない成瀬と初めて言葉を交わしたのは夏期講習の休み時間だ。

「白石さんは好きなバンドとかある？」

初めて成瀬に声をかけられた。日奈は戸惑いつつ答える。

「えっと、メルフィラとか。メルト・フィラメント」

「えっ！　メルフィラ好きなの？」

食いついた成瀬に周りが首をひねる。

「なにそのバンド」「聞いたことないけど、有名なの？」

と知っている人はほかにいないようだ。成瀬と日奈は顔を見合わせた。

「まだメジャーデビューしてないけど、かっこいいバンドだよ」

「そうそう、新曲も良くて。サビの歌詞が天才的なんだよ」

「新曲！　もう聴いたの？」

そこから打ち解けるのは早かった。その日のうちに連絡先まで交換していて、ＣＤの貸し借りをしたり一緒に自習をしたり。呼び方も白石さんから白石になり、成瀬くんから成瀬になった。

思いがけず楽しかった夏期講習が終わり、あっという間に冬が来て、日奈は目標点数に届くようになった。成瀬も自己最高得点を更新したと嬉しそうに話していた。息抜きと称して一度だけ一緒にライブに行ったこともあったし、休日に図書館に行ったりもした。

恋愛をする余裕はなかったが、淡い期待がないわけではなかった。

受験日当日、まだ陽も昇らない時間帯に起きてスマホを開くと、数分前に届いたばかりのメッセージが表示されていた。

「今日は頑張ろうな」

たった、一行。日奈はかじかむ指を慎重に動かして、

「うん。頑張ろうね」

やはり一行だけ返した。

――もしかしたら会場で会えたりしないかな。

バスの中でそんなことを思ったりしたけれど、会場につくとそれどころではなかった。慣れない机と椅子、張

りつめた空気、教室にいる全員がライバルという環境は日奈にとって初めてで、目の前に出される問題を必死に解いた。予定していた時間配分もぎりぎりで、出題された問いと覚えていた箇所が微妙にズレていたり、見直しまで間に合わなかったり。昼食の時間も単語帳を片手にあがいていた。やっと解放された時は全て燃え尽きて、あとは神頼みしかなかった。

受験が終わったため塾に行く頻度も下がった。必然的に成瀬と会う日もなくなったし、共通の話題が減ってメッセージのやり取りも少なくなった。寂しかったが、しつこくして面倒な女だと思われたくもなくて迷っているうちにやがては途絶えた。

合格発表後、塾に張り出された名簿で成瀬も合格していたのを知った。なにかメッセージを送ろうか、どうしようか。迷って迷って、迷った挙句に送らなかった。

入学式に会えるかもと期待していたが、学年全体で三百人いる中から見つけるのは困難だった。クラスも一緒になることがない。

本当にこの学校にいるのか不安になっていた頃、廊下を歩いていると「成瀬くん」という声が聞こえた。振り向くと成瀬とマネージャーらしき女の子と話している。隣にいた涼子も成瀬のことを知っていたようで、かっこいいねなんてことを口にしていた。

日奈にとって、学校で見る成瀬は知らない人のようだ。

「成瀬、くんって有名なの？」

日奈が聞くと涼子は驚いた顔をしていた。

話を聞けば、中学の頃から陸上の有名な選手で人柄も相まって皆の憧れだった。入学式から一か月も経っていないが一年女子の間ではイケメンと話題になっている。

――らしい。

「まあ、日奈は興味なさそうだよね」

「タイプじゃないってだけですー。ほら、次の授業行こ」

日奈はむくれた振りをしてその場から逃げた。もし、成瀬と目が合ったとして何を言えばいいのか分からなかったからだ。

その後、一度だけすれ違いざまに挨拶する機会はあったが、周りの目が怖すぎて一言交わしただけで日奈はまた逃げた。それっきり会話することもなかったし、連絡を取ることもなかった。――こうして二年で星玲祭の実行委員として会うまでは。

一年ぶりに交わす冗談交じりの会話や他の女子とは違う距離感に、期待がないわけではない。でも一歩踏み出すには確信的なものが足りてなくて――、違う。

私が怖くて踏み出せないだけ。

高校生にもなって中学の頃の煮え切らない恋を持て余している。なにか、があればいいのに。とそればかりを

思ってしまう。成瀬に告白できるような、そんな出来事があれば私だってと。
代り映えのしない淡々とした星玲祭の会議を聞きながら、日奈は前の席に座る成瀬を見つめた。

*

「愛美先輩、これ借用申請書です」
日奈が書類を手渡すと副委員長の佐藤愛美は驚いた顔で受け取った。六限目の会議終わり、人が少なくなった教室には二人しか残っていない。
「今回は早いね。ちゃんと書けた？」
「ちょ、ちゃんと書きま……、書けていると思います」
不安になって語尾が弱くなると佐藤は笑った。
「まぁ、日奈ちゃんは大丈夫よ。あと頼まれてたメルフィラのチケット取っておいたから、今度持ってくるね」
「本当ですか！　ありがとうございます！」
佐藤とは実行委員になる前からの知り合いだ。ライブで仲良くなったのだが、思いがけず同じ高校で驚いた。それから色々とお世話になっている。
「二枚、だったよね？　成瀬くんと一緒に行くの？」
突然ぶっこまれて日奈は目を剥いた。
「いやいや、友達ですよ」
「照れなくてもいいじゃん。付き合ってるんでしょ」
でしょ、と確定的な形で聞かれた問いに日奈は一層慌てた。
「付き合ってませんよ！　そんな浮いたことはまったくないです」
「……うそだぁ」
疑うように尋ねた佐藤の顔が次第に驚きに変わる。
「まじで付き合ってないの？　委員のなかで有名なんだよ、君たちお似合いだよねって。文化祭マジックは毎年あるけどそれを抜きにしても付き合ってると思ってた」
「そんな空気でした？　成瀬くんだってたぶん普通ですよ。誰にだって距離近いし、すぐ仲良くなれるから噂になりやすいんです」
一年のときも陸上のマネージャーとも噂があったのに付き合ってなかったから、と日奈が付け足すと佐藤は微妙な顔で首を傾げた。
「日奈ちゃんもなんとも思ってないの？」
いつもだったら笑い飛ばす質問にほんの少し否定するのが遅れた。佐藤はその微妙な間合いを読み取って「なるほど」と呟く。
「どっちが意気地なしなんだかって感じなのね」
「意気地なし……」
どこまで読み取ったのか、恐ろしく的確な表現が心に

刺さる。
「まぁ部外者がいうことでもないけど、ね」
距離を取る言葉に驚いた。この手の話題を振る人はだいたい踏み込んでくることが多い。部外者、と引いた佐藤にありがたくもあり、寂しくもなった。
——だからだろうか。
「いや、なんか、タイミングがなくて。なにか決定的なものが欠けているっていうか」
日奈は吐露する。佐藤はへぇ、と興味本位の顔で笑った。
「なにか、ね」
「漫画とかドラマみたいな。ここだっていうタイミングとか、好きだと確認できるような出来事とか待ってしまっているんです。成瀬くんはずるいですよね。ああやって気ままに振る舞えばいいんだから。わたしばっかりが期待しちゃって」
佐藤はジト目の微妙な顔をした。
「……うん」
「なんですか。めっちゃブスですよ、先輩」
「うわ、限りなく失礼！」
はぁあ、と大きく佐藤はため息をはく。
「釣り込んで吐かせた身で言うのもなんだけどゲロ吐きそう」
「人の話を聞いといてゲロっていうのやめてもらえます？」
日奈のツッコみを佐藤は「うるさい」と一蹴した。それからあー、だの。うー、だのと呻いて鼻の頭にしわを寄せながら両手で頬杖をつく。
「こういうと私がタイミング作ったみたいで癪なんだけどぉ。あのさ、つまり日奈ちゃんは大袈裟でドラマチックなことを待ってるわけだ。そんで、自分の恋心を雑に扱ってきたわけだ」
「雑ってわけじゃ……」
佐藤にシッと鋭く音を出される。威嚇音のようでつい笑ってしまった。
「はー！　誰がみても恋する乙女なくせして期待っていう言葉に逃げてきたんでしょ⁉　何年恋してきたのよ。私に言ってみなさぁーい！」
うっ、と日奈は鼻白む。
「恋してる、のは、ここ数週間」
「じゃあ、期待し続けてきたのは！」
容赦なく突かれて呻く。これは見透かされている。
「……三年目です」
「だあああ、なんっだそれ！　羨ましいぃ。でも私の流儀に反するー！」
とうとう机に突っ伏してしまった佐藤はわざとらし

く鼻をすすった。腕の間から目を覗かせて日奈を見上げる。「これ、上手くいったら私の手柄なんだからね……」と前置きしたうえで、佐藤は続けた。
「いい？　タイミングって結果論なの。日奈ちゃんが大袈裟なこと待ってるっていうんなら、今がそのチャンスでしょ。行動に言い訳つけたいなら絶好の機会なわけ。――ねぇ、この時期なんだと思ってんの？」
日奈はなんとなく答えが分かっていた。そして佐藤のほうも日奈が分かっているのを見越していて呆れた顔を隠しもしなかった。とんだ茶番だ。日奈はスカートを握りしめた。
「文化祭の準備期間だよ？　さっさと言い訳にしなさいよ！」

廊下をできる限りの速さで走った。
ああ、今すぐに伝えないと、言い訳がなくなっちゃう。日奈は一歩踏み出すごとに、今まで引いてきた見えない線を越えていくような気がしていた。文化祭準備で忙しい生徒で溢れる廊下をひたすらに走る。もう立ち止まることはしたくなかった。
だって、教室に王子みたいに現れたから。
運命みたいに再会できたから。
頭を撫でられたから。
お互い好きだったライブのチケットが取れたから。
先輩に呆れた顔で背中を押されたから。
放課後に手伝いの約束があったから。
――たぶん、言い訳にしたいことなら山ほどある。

準備室までいつもの倍ほども長く感じられた。
息を整えて扉を引き開ける。教室では成瀬が先に待っていた。
「そんなに慌てなくてよかったのに」
笑って迎え入れる成瀬のほうへ一直線に向かった。無言のまま近づくと成瀬は後ろへ一歩引く。日奈は構わず距離を詰めた。
「え、な、なになにっ……!?」
一気にパーソナルスペースに入り込んで成瀬の胴に手を回す。恥ずかしくて目は固くつむったままだ。手が一瞬行き場を迷って、ぎゅっと服を掴んだ。
――あ、思ってたより硬いんだ。羞恥も行き過ぎるとなくなってしまうのか、思い切って頭も預けた。成瀬はその間ぴくりとも動かなかった。
一、二秒ほど経っただろうか。動かない成瀬に日奈は焦れた。
「……成瀬。迷惑なら、あの、」

あまりにも反応がなくて顔を上げようとすると尋常じゃない力で抑え込まれる。首が沈み込んでしまうほどの力だ。必然的に密着度が上がって日奈もひぃっという声が漏れた。

「……あのさあ、」

「……はい」

なぜか掠れたような声で成瀬が口を開いた。日奈もなんとか返事を返す。

――痴漢で捕まったひとってこんな感じなのかしら。

警察署で調書を取られている気分だ。

「罰ゲームとかですか、これ」

「罰っ、いや、そんなわけではないです」

つられて敬語で返す。

「誰かがこれをみてるわけではない……んだな？」

「はい……」

押さえつけられたままの頭が痛い。こんな間抜けな絵面は死んでも見られたくないに決まっている。涼子に見られたが最後、ずっとからかわれてしまうだろう。

「成瀬、そんなに押さえつけられるとリップ付いちゃう」

「ちょっと、黙ってて」

「うん」

黙ってて、と言われたが動揺している成瀬が珍しく好奇心がうずいた。とんとん、と成瀬の背中を叩くと腕の力が弱められる。隙を見つけて顔を上げると、

「勘弁してよ……」

「うわあ、うわあ――……」

思わず意味のない言葉が漏れる。見たことのない顔をしていた。日奈のほうにも移って羞恥がぶり返してくる。

「白石さぁ、ほんとたまに大胆になるよな」

はあ、と成瀬は息を吐いた。諦めたように日奈の背中に手が回る。

「……そうかな」

「いまさら照れるの止めてくれない？」

やめて、と言われても。日奈は赤くなった頬を隠すように成瀬の胸に顔を押し当てる。「そういうとこだよ」と声が降ってきたが無視した。

ちょっとの間、互いに沈黙する。なにか喋っていないとドンドン緊張していって、日奈の心拍数はマラソン終りかというくらい跳ねていた。

「――あの」

耐え切れなくなって日奈が口を開くと成瀬から「待った」がかかる。おとなしく待っていると、成瀬の胸が大きく上下した。

「好き、です。あー、付き合ってください！」

私がいうはずだったのに先越されちゃったな。ていうか、告白する前提だったから返事ってどうしたらいいん

だっけ？
「はい……？」
つい疑問形で返すと頭をはたかれた。
「なんで疑問形なんだ。こっちは少しずつ頑張ってたのに、引き金引いてきたの白石のほうだろ⁉　星玲祭のときに告白しようと思ってたんだぞ」
成瀬に暴露につい笑ってしまう。笑いごとじゃない、とまたはたかれた。
「私だってちゃんと経緯があってこうしたんだから」
「やり口が強引なんだよ」
強引、と言われた意趣返しにさらに力を込めて抱きしめると成瀬はまた黙った。身長差で顔が見えないのをいいことに日奈はこっそりと笑う。優位に立ってしまえば結構大胆に行動できるんだな、と自分の知らない面を知った。
「成瀬、めっちゃいい匂いする」
「変態くせぇな。あーあ、もう、早く終わらせて部活行こうと思ってたのに」
その言葉に窓を見ると随分と暗くなっていた。時計はまだ五時だ。視線を動かしたタイミングで抱きしめられていた腕が解かれた。ちょっと残念。
「三十分で片付ければ一時間位はできるんじゃない？」
「暗くなるの早くなってきたから、今週から完全下校が六時」
「もうそんな時期なんだ」
付き合っても変わらない間合いが不思議で思わずにやける。こんなことならもう少し早く告白してればよかった、とか思ったりして。
「なに、なんで笑ってんの」
「いや？　付き合えたのが幸せだなーとか思ったりして？」
にやけ顔が恥ずかしくて手で口元を覆う。
「むちゃくちゃかわいいこというな。ばか」
聞いたことのない不機嫌な声と言葉のギャップに、日奈は声を上げて笑った。

「Tu mihi sola places : placeam tibi, solus」
私を喜ばせるのは君だけだ。君を喜ばせるのは私だけでありたいんだ。

初めてギターを触れたときのことを思い出していた。
ステージのライトに照らされた彼女がひどく眩しかったからだ。彼女の細い腕が力強く弦をかき鳴らすたびに音がさんざめいて、振り絞るように歌う声が刺さるよう

に痛くて、時折こぼれる笑顔が、どこか懐かしさを含んでいた。

——ああ、あんなふうに弾けたのはいつだったっけ。

井原夕莉は粟立つ身体を守るように抱きしめた。

*

「夕莉、さっきのフレーズもう一回弾いてみて」

苛立ち紛れにボーカルの凛は歌声を止め夕莉のほうを指さした。

「さっきのところ、すこしズレて聞こえたんだけど。前も間違えてたよね」

「ごめん」

とっさに謝る。

「いいから弾いてみて。さっきのテンポで」

テンポをキープしつつ一通り演る。単体なら大丈夫だ。少し左手に集中しすぎて自分のことに精一杯になってしまい、周りの音を聴けなくなってしまうから遅くなる。

原因は分かっている。単に自分の練習不足だ。

「ちゃんと練習してくる」

「あのさぁ、」

何かまだ言おうとしていたボーカルをベースの「まあまあ」という声が止めた。ガタついた音が聞こえたので見ると、片づけを始めたようだ。時計は五時を指していて、ライブハウスを借りられる時間ぎりぎりになっていた。

「なあ、俺のスティックケース知らねぇ?」「鞄のとこ転がってたぞ」

集中が切れて喋り始めたメンバーに凛は苛立ったように目をつむった。

「あーもう。夕莉はちゃんと練習してきてよね。来週本番なんだから」

「すいません」

頭を下げると急いでアンプの電源を切る。音量のつまみをゼロにすると、あからさまにため息を吐かれた。夕莉は下を向いて耐える。お気に入りのはずのピンクのストラップがやけに浮いて見えた。

夕莉の所属するバンドは最近どうも上手くいっていない。

もちろん今日は夕莉が全面的に悪いがバンド練となると毎回誰かしらの機嫌が悪くなる。どうにかしなければと思う反面、面倒くさくなっているのも事実だった。

これが駆け出しだったならあっさり解散していたと思う。このバンドは良くも悪くも四年間続いて、地元でそこそこの知名度の持つグループだ。メンバーそれぞれに

ファンもついていて、正直なところ解散するのも面倒くさい。
　また来週の本番というのも厄介で「メルフィラ」のワンマンのオープニングアクトなのだ。
　メルフィラはアマチュアとはいえ地方のラジオで番組を持っていて、ワンマンをできてしまうほどの動員数をもつ。動画サイトから人気を博し、中高生を中心にじわじわと知名度を上げているバンドだ。おそらく今回のチケットもソールドアウトだろう。
　そんな人気バンドの前座を務めることになったのだ。空気がぴりぴりするのも分かる。でも問題は簡単なことではなくて、これまでどことなく我慢していたものが溢れているのだ。例えばメンバー内の恋愛や小さな苛立ち、金銭的な格差、演奏技術。
　一番大きいのがバンドに対する情熱。
　背中にずっしりとくるギターケースを背負ってライブハウスを出るとすっかり暗くなっていた。マフラーを着けるほどではないが気温も冷えている。はぁ、と息を吐くと肺に冷気が入り込んで身体がしゃんとする気がした。
「じゃあ、俺たちこのあとバイトだから」
「凛は少し喉のケアしとけよ。後半嗄れてたぞ」
「余計なお世話よ。てか、忘れ物してない？　こないだ財布忘れてたでしょ？」
「するわけねぇだろ。じゃあな、高校生諸君！」
「お疲れさま。じゃあね」
　ドラムとベースが連れ立って消える。誰もいないことを確認して凛は夕莉を睨んだ。
「夕莉、あんたってホントに孝也さんと付き合ってないの？」
「だから、付き合ってないって。向こうも興味ないよ。私みたいな小娘を好きになるわけないじゃん……。いい加減しつこい」
「だって、さっきもあんたのこと庇ったじゃない」
「まあまあって言っただけでしょ」
　孝也さん、とはバンドのベースのことだ。凛はずっと片思いをしている。牽制する暇があるならサッサと告白でもしてほしい。――そのせいで面倒なことになっているのだから。
　凛をあしらっているとポケットの中のスマホが振動した。夕莉は漏れる光を一瞥して、
「このあと用事あるから。じゃあ、また明後日」
　夕莉は早足でその場を後にした。
　ある程度距離をとってから画面のポップアップを確認する。件の孝也さんだ。
『今日は災難だったね。ちゃんと帰れた？』

――いい加減しつこい。

固く目を閉じてやり場のない怒りを抑えた。彼が何を期待しているのかが理解できないほど子供じゃない。ただ向こうだって子供じゃないのだから私の態度で察してほしい。

さっさと告白でもしてくれればフるのに……。願うことなら凛とくっつけばいい。

適当に返事を返して別のトーク画面を開く。

『いま練習終わった。そっちついてる？』

しばらくするとメッセージが表示された。佐藤愛美からだ。

『コンビニ寄ってる』

『肉まん』

『じゃかしい、自分で買ってこい』

軽快な会話につい笑いが漏れた。待ち合わせの公園まであと数分もない。夕莉はギターケースを背負いなおし、ゆっくりと歩き始めた。

＊

佐藤愛美は本物の天才だ。私の周りでは唯一の、天才。

天才といってもギターの技術はまだまだ稚拙だ。十年そこらしかギター歴のない夕莉がいうのも何様だ、という感じだが。でも驚くほど勘がよくて耳もいい。中学に入ってからギターを始めたといっていたがそこらへんの高校生より普通にうまい。

でも愛美の才能はギターではなくて歌にある。

愛美の声は女性としては低めの声だ。空気に溶けるような声で、ピンと張った緊張感や期待感のなかでスッと伸びていく。一度聞いてしまえば忘れられない声だ。彼女が歌い出せば皆が動きを止めてステージを見る。――魅入ったらもう抜け出せない。

夕莉もそうだった。

出会ったライブは対バン形式のものだった。たしか高校一年の時だ。夕莉たちのバンドは出演バンドの中では知名度が一番あったからトリに回されて、ただのコピバンやひらすら声を張り上げるだけのバンドに辟易していたのだ。外に出てもやることもなくライブハウスの壁に寄りかかりながらボーッとしていた。

前のバンドが楽器を片付けて愛美が出てきた時も別になんとも思わなかった。（女の子の弾き語りって珍しいな）くらいだ。もっていたアコースティックギターも高校生が持つには妥当なものだったし、出で立ちはどちらかというとオドオドしていた。

挨拶もそこそこに、アコギの音を確かめて「オリジナル二曲です」と言ったときも別になんとも思ってなかっ

た。でも、退屈しのぎにはなるかなとは思った。それくらいオリジナルを書ける人間が少なかったというのもあった。

イントロの弾き出しも悪くなくて、なんとなくステージのほうをみたとき。

彼女の歌いだしの一音で、

ココロの中を思いっきりかき鳴らされた。

——気がした。

琴線に触れるってこういう事か、と思った。足元から鳥肌の波が駆けあがってきて、思わず漏れた息が震えた。会場にいた誰もが愛美を見ていた。ライブハウス特有のビリビリとする爆音も、その時ばかりは意味が違った。本当に身体が痺れるような衝撃だった。

夕莉は思わず前のめりになって愛美だけを見つめていた。

見つけた、と思った。なにを、何かを。

ステージの光に目が眩んだ。光のど真ん中で歌う彼女がまぶしい。

囁くような、ウィスパーボイス気味のAメロとBメロ。熱量と音圧を上げたサビ。そのままのテンションで入る間奏。熱し過ぎた身体を制御するように入れた一瞬の呼吸音、声量を抑えて呟くようなCメロ。遠目からでも彼女が内に秘めた熱をぎりぎりまで抑えているのがわかった。限界まで張りつめられた弦をつま弾くように歌っていた。

——ああ、私ならもっと、

もっと……、なんだろう。とっさに浮かんだ言葉に答えが見つからず拳を握りしめた。確かに彼女の演奏テクはぎりぎり及第点ってところだ。張り合ったのだろうか。

二曲目に入った彼女を見つめる。恋愛ソングだ。

観客もやっと目が覚めたのか、はやし立てる声が上がった。愛美も嬉しそうに笑顔を返してギターを鳴らす。スポットライトの光が舞って夕莉は目が眩んだ。

命を燃やしているかのように振り絞る声が痛い。彼女の声で歌いあげられる愛が刺さって、身体が熱を持つ。当の本人は楽しそうに歌いあげていた。その姿が焼き付いて、先ほどまでのツマラナイ顔をした自分が恥ずかしくなって、その心情に連動するような歌詞に肌が粟立つ。へたくそなギターが世界で一番素晴らしく見えた。

あんなふうに弾けたのはいつだったっけ。

ステージの上で演るのが楽しくてたまらないって顔をしたのは、いつだろう。

初めてステージに立った時のことを思い出していた。初めての演奏はアガって指も全然回んなくて、曲もテンポがズレて分解しかけて、それでも楽しかった。ドキド

キしていた。袖に引っ込んでメンバーとライトの熱で上気した顔を見合わせて笑った。それだけで良かったのに。

「夕莉。夕莉？　そろそろ準備しよ」

後ろから控えめに肩を叩かれた。気が付けば曲も終わっていた。

「うん、すぐ行く」

夕莉は返事をして、振り切るように楽屋口へと向かった。

後日、そのライブの夕莉の演奏は酷かった。とだけ愛美に聞いた。

星玲祭での打ち合わせのときだった。体育館のステージライブの段取り決めを二人ですることになって、初めて喋ったのにそんなことを言われて思わず笑った。

限りなく失礼がすぎる。

「学外じゃ有名でしょ、あのバンド。夕莉も高校生だけどギター凄いって噂だったし。でもそんなことないじゃーん、みたいな。でも別日の夕莉はハチャメチャにかっこよくて！　友達になりたいのに緊張しちゃったから文化祭を言い訳に話しかけてみたの」

と、語尾にハートマークでも付けそうな勢いで来られたのだ。

もうすこし大人しい女の子を想像していたが、そう上手くは行かないらしい。案外図々しくて、失礼な女だ。才能を感じてしまうのが嫌になる。でも、彼女とは音楽の話以外でも意外とウマがあってよく一緒にいるようになった。

あれからもう二年。ケンカもあったし、口を利かない日もあったし、怒られた日もあったし、怒った日もあったし、泣きながらメンチ切りあった日もあったし。そんなこんなで二年だ。愛美とはケンカしてるか、はしたなくゲラ笑しているか。両極端な日々を過ごしてきた。

最近、私たちは最後の曲を作っている。

バンドにも内緒にしているアコギとエレキだけの曲だ。

*

「いやー、もう外でギター弾くの限界すぎん？」

「流石にもうきついよね」

教室内だというのに手が少し寒い。夕莉と愛美は放課後の空き教室に集まっていた。

夕莉はチューニングを済ませて走り書きの譜面を覗き込む。この間、公園に集まって合わせていたが、寒さと時間の限界で無理やり切り上げた箇所を見た。もう少し練りあげたかったが補導される時間が迫っていて愛美に

追い立てられるように止めたのだ。
「こないだ、途中で止めたのが気になってさぁ」
「あー、土日に模試が入って出来なかったもんねぇ。そろそろ公園も限界だし」
「かといって、スタジオ借りられるほどお金ないんだよなぁ」
切ない嘆きだ。音楽をするのには金が要るのだ。
「夕莉さぁ、ちょっと顔貸してみない？　私に」
「……何する気」
じろり、と夕莉が睨むと愛美はしたり顔で笑った。
「あんた、ギターの割に顔がいいじゃない？」
「ありが、と？　いや、失礼なのか？」
「で、固定のファンもいらっしゃるでしょう？　ちょーっと男装してギター構えてくれたらいいのよ。ちょっとだけ。で、そのあと、ちょっとだけでいいから可愛いセーラー服とか着てエピフォンのレスポール・スタンダード。色はヘリテージ・チェリーなんちゃらを構えてくれない？」
「まてまてまて、まさかそれは」
愛美はにやにやして夕莉の太ももを撫でる。
「売れるわよ。コアなオタクと女のファンに！」
一枚三百円、ポーズ指定のチェキは五百円でどう？と太ももを揉み始めた手を夕莉ははたきおとした。なによ！　と睨む顔を容赦なくつかみあげる。
「事務所を通してくださいねー」
「ばかか、お前！　ファンデが崩れるだろうが！」
吠える愛美が噛みつこうとしたところをすんでのところで躱す。夕莉は声を上げて笑った。髪の毛をぼさぼさにした愛美もつられて笑う。
「ひひっ、あんた今噛みつこうとした？　やばくない？」
「んんふっ、いや、まってよだれ出た」
ひとしきり教室の床に転がって笑いこけると憔悴した顔で愛美が起き上がった。
「はー、疲れた。ほら、曲やろ」
寒気すら覚える冷たい床で寝っ転がったまま愛美を見上げる。
自然と伸ばした右手を愛美が当たり前のように取って、
「時間がないから早く」
と笑った。

あっちのCDを聞いては、こっちのコード譜を読む。実際に弾いては書きこんで、一連のメロディーを弾き通しては頭を抱える。こっちの音がおしゃれだけど、この後に続くのを考えるとこっちがいいかも……。いや……、と夕莉が腕を降ろすと見計らったように愛美が

寄ってきた。
「ねぇー、これ、どう？　サビはこうで……、」
ジャララッ、と音を鳴らしていく。
「――そして、こう、」
手を止めて聴いていた夕莉が「ま、まてまて」とギターを構えなおした。
「そこにタメ入れたらかっこよくない？」「めっちゃいい！」
夕莉がジャッと音を入れると、弾けた様に愛美は音を奏でだす。
「ふふん、ふふー、愛がほにゃらら」
調子が上がってきた愛美に夢中で付いていくと突然、歌詞が飛び出して来て驚いた。
だって、いま、あんた。
「あれ、違った？」
「いや、え、私あんたに言ったっけ」
「んんー、言ったような、言われてないような？　でも分かるよ。これ」
誰かが愛してるーっていってる曲でしょ？
ふんふん、と鼻歌を止めずにのたまった。夕莉は思わず手を止める。
「あのー、誰だっけ。軽音部の後輩君。一年の」
口を開こうとしたタイミングで愛美は話を九十度変える。夕莉は思わず頭が真っ白になった。今日はいつにも増して話題の回転が速い。
「え、なに。誰」
「ほら、あのー、よく夕莉に「教えてください」ってくる。可愛い子がいるじゃん」
夕莉が回らない頭で正解を叩き出す。
「あ、もしかして奥田勇太くん？」
「そうそう。その子がね、「井原先輩がよく鳴らしてるコードあるじゃないすかぁ。あのなんか耳障りなやつぅ。先輩たちが作ってる曲は今のままで綺麗だと思うんすけど、しょっちゅうそのコード入れようとして失敗してるんでぇ」って」
「でた、悪意ものまね。そんでなに耳障りなコード？」
そんなのあったっけ？　と首をひねる。
「えっとね、まって、確かセブンスコードだったのよ」
デレレッと愛美が鳴らすと、ああ、と夕莉は微笑んだ。
「なるほどねぇ。確かに単体だと耳の残る音だもんね。胸がざわつく感じの」
愛美は何度か音を出すと「気に入らないなぁ」と一気に腕を振り降ろした。アコギの大きな音が響き渡る。
「だれよ、その男！　セブンスコードが似合う男と付き合うつもり！？」
「なになに、なんの話！？」

「バカでも分かるわよ！　愛を歌った曲に夕莉がこだわるコード！　どうせその男のために作った歌なんでしょぉー！」
　とんだ勘違いに夕莉はため息を吐いた。
「違うから。人間愛的な曲だから、きみもあなたも愛してますよ〜みたいな」
「……そうじゃないでしょ」
　ムスリとした顔で愛美は言う。
「AメロもBメロも歌詞を書こうとした。でも書けなかった。無理やり当てはめて歌ってみても、全然だめだった。誰かを愛してる歌ってのは分かる。だからこれは私の歌じゃない」
　その言葉を聞いて夕莉は苦笑した。天才は難儀な生き物だ。
　――誰が言えるか、ばか。
　誰かに愛を伝える歌、とまで言われて。愛美のものじゃない、とまで言い切った。
　そこまで見透かされてて、誰が、
　私が愛美のために作った曲だといえるだろう。
「だって、怒られるから言わなかったけどインストにするつもりだったんだよ」
　インスト曲とは歌詞のない曲だ。
　愛美は作った曲すべてに歌詞を書く。でも夕莉は歌詞を書いたことがない。だから、この曲は完成しないまま卒業式を迎えるつもりだったのだ。書いたとしても、誰が愛美に歌わせるだろうか。好きな人に、「好きな人宛に書いたラブレター」を音読させるようなものだ。
　どんな人間でも羞恥の過剰摂取で死んでしまう。
　自分だけで書き上げるはずだった曲に、愛美を引きずり込んだのはただのエゴだ。卒業するまでに、なにか二人のモノが欲しかった。可愛いわがままだ。
「別に曲として完成させたいわけじゃなくて、卒業式まで愛美と遊べればいいなと思って提案した。バンドの練習もなくなっちゃうから」
　不機嫌だった愛美の表情が一変して怪訝な顔でこちらを見る。
「え、解散するの？」
「ううん。解散は面倒だから、私だけが脱退って形で。進学もする予定だったし、今度のメルフィラのライブで終わりにしようと思ってる。」
「なんかあったの？」
　夕莉は察しのいい質問に笑う。
「うん。いろいろと面倒なことになってて私が抜けなくてもいずれ空中分解キメそうになってる。四年もやるとファンとか付いて好きなことできなくなってくるし。ありがたいんだけどね」

「空中分解キメるって、まさか恋愛事？　バンドには御法度じゃない」
　凛と孝也さんのことを思い出して苦笑いすると夕莉の目がまんまるになった。
「まさか、夕莉が好きになっちゃったの！？」
「……え？」
「で、置き土産に私と恋愛ソング書いて去ることにしたの！？」
　いやいや、と否定しようとすると、ぎゅっと手を握られた。
「似合わないロマンティックを目指したのね」
「まって」
「えー、やだぁ。最近私の周りにロマンティック多すぎるんだけど。私自身には浮いた話がないのに周りばっかり恋愛に突っ走ってちゃう。しかも夕莉ごときに先越されたんだけどちょっとむかつく！」
　夕莉は呆れて愛美の手から自分の手をひっこぬいた。そのまま愛美の顔をつかむ。
「はいはい。そうだね、かわいそうに」
「おま、ファンデが、ちょ、痛い痛い！」
　ぐっと力を籠めると、丁度こめかみに指先の固い部分が当たるようだ。縋るように重ねられた愛美の手が引きはがそうと躍起になっている。
「あんた、ギタリストの指先は殺傷力高いのよ！　手加減しなさいよ！」
「この話題やめるってんなら離す」「やめる、ぜったいやめる！」
　言質をとって手を離すと愛美は大袈裟にこめかみを揉んだ。
「なんか痛みで考えてたことも飛んだし、やる気も消えたわ」
「同感。なんか演る？」
　適当にギターを鳴らすと「これがいい」とスマホを差し出された。
「あー、いいね」
『記念撮影』はたまに歌いたくなるのよね」
　愛美が画面を追いながらアコギを鳴らす。夕莉はアドリブ交じりにそれに加わる。特徴的なイントロを鳴らすと、待ちかねたように歌いだす。
「――目的や理由のざわめきからはみ出した、名付けようのない時間の場所に、」
　何気ない歌い方だ。別に気合を入れて歌っている訳ではないくせに、悔しいほどカッコいい。あの頃と同じ、いや、それ以上に身体を刺すような声が教室に響き渡った。思わず足でリズムを取ると、みつけたといわんばかりに愛美は笑った。夕莉も笑みを返す。

「――ねぇきっと、迷子のままでも大丈夫。僕らはどこへでもいけると思う。」
サビにさしかかって夕莉がハモリを入れる。
愛美はまるで命を燃やしてるようだ、と言ったのは誰だったか。
あの日、初めて愛美をステージで見た日、誰もが思っていた。ライブ終りにすごかったとバンドメンバーも褒めていた。歌の底に眠る、一掴みの真意を愛美は見つけるのがうまい。それを容赦なく叫びあげて突き刺す音に、声に、聴いているものの心の底が揺らされる。
ズルいという感情はとっくに捨てた。愛美の激情がたまに愛美自身を焦がすのを見ていたからだ。他人のココロを手酷く燃やすのも見ていた。
「――想像じゃない未来に立って、僕だけの昨日が積み重なっても。その昨日の下の変わらない景色の中から、ここまで繋がっている」
だから、この気持ちはこのままでいいかな。とも思っている。
一緒にいた毎日を忘れることは一生ない。この恋を忘れることもない。この声を忘れることなんてありえない。愛美の笑顔をみているだけでいい。
ラスサビ前で音量をひとつ上げた。
事前に打ち合わせたかのように愛美も音圧を上げた。
一層クリアになった声が響く。
〝――ああ、私ならもっと〟
あの時思ったのは、たぶん「もっと演ってみせる」だったと思う。私ならもっと愛美を自由にしてみせる、という愛美に向けた嫉妬だった。加えて、愛美と奏でる楽しさの予感だった気もする。
あとはあんな風に誰かを惹きつけてみたいという憧れ。それこそ、一瞬でもいいから動きを止めてしまうような演奏をしてみたかった。私が望む音楽のかたちは愛美のような、誰かに刺さる凶器だったのかもしれない。誰かの心を引き留めるような、握りつぶすような、抱きしめるような。
「――今、僕がいる未来に向けて。」
最後の小節をリフレインしつつ、ゆっくりと音をフェードアウトさせる。すべての音が止んだとき愛美が笑った。キラキラした目でこちらに笑いかける彼女に、夕莉は穏やかに笑みを返した。見計らったように教室のドアがノックされる。
夕莉と愛美が振り返ると呆れ顔をした教師が腕を組んで立っていた。
「あなたたち、下校時間過ぎてるわよ。受験生っていうのにしょうがないわね……」
「固いこと言わないでよ、川田ちゃん」

「ていうわりには、外で聴いてたでしょ？」
にやにやしつつ問いかければため息で返された。
「学年主任に怒られるのは私なんだから。でも、今日もすごかったわ」
教師からの言葉に夕莉と愛美はにやつきながら楽器を片付けた。
「じゃあ、もう真っ暗だから気を付けて帰りなさいね。ちゃんと勉強もするのよ！」
はーい、と揃っていい返事を返すと二人は荷物をかき集めた。ギターをケースに入れて、ばら撒いた紙類を外ポケットにがさつに詰め込んでいく。
身支度を整えて、教室の電気を消した。
「もうこの時間でも真っ暗か……」
「いやー、太陽は気合が足りないのよ」
「なにいってんだ」
足元が見えないためスマホの明かりを灯して廊下に出る。
川田ちゃんが点けてくれたのか、廊下は電気で明るかった。
「明日どうするー？」
「なにが。曲？」
廊下を歩きながら愛美は寒さに身をすくめた。
「いや、カーディガン。着る？」
「あ――、うん、着るかな。この寒さは」
「絶対ね！　裏切りなしだからね！」
「はいはい」
ちら、と時計を見れば六時二十五分だ。やばいと夕莉は呟く。
「閉門まであと五分！　いそげ！」
「ぎゃ――！　ちょ、楽器が揺れる！」
どちらが先に門を通れるか。
夕莉と愛美は笑いながら駆け抜けていった。

「Vale et memento mei」さようなら、私を忘れないで

仕事に疲れ、自宅のソファの上で溶けたようになっていた川田麻子はネットニュースをスクロールする手を止めた。文字を追うのに合わせて一度姿勢を正して、次第に前のめりになっていく。一度全て読み通し、息をひそめ、再びゆっくりと頭から記事を読み直した。
ネットニュースといっても全国紙のようなものではなく、地元の地方紙のサイトだ。
教師という職業柄、赴任校の周辺には聡くなっておこうと一日一度は目を通すようにしている。地元企業の情報や他校の情報、たまに卒業生などの記事があったりし

て、新人の頃に「読んでいて損はない」と指導教諭から教わったサイトだった。
その中の一記事でひどく懐かしい名前を見つけた。
たしかに一字の間違いもなく、長年探していた人の名前が書いてある。別に生き別れた兄弟とか、復讐すべき相手とか。ドラマのような展開のような大層なものではないけれど。そうじゃないけれど、麻子にとって自分の名前の次に大切な名前だった。
『――大学院 量子物理学研究室の根井健太郎助教が、日本物理学会 若手奨励賞（素粒子実験領域）を受賞しました。受賞対象の研究は以下の通りです……』
堅苦しい文章と意味の分からない言葉と英語の論文の羅列の中で、根井健太郎という名前が浮き出ているように錯覚する。信じられない思いで、麻子は名前にそっと触れた。
十年ぶりの再会だった。

＊

ハッと気が付くと、目の前に白いなにかが迫ってきていた。
――あ、カーテンか。と気が付いたときにはすでに麻子の楽譜がぶわりと風にさらわれた後。しかも運の悪いことに枚数の多い課題曲。楽譜を貼り付けるためのスケッチブックを慌てて抑えたが間に合わない。
「ああ！　うそ、のり付けしてたのに！」
麻子は宙に手を伸ばす。が、風でふわふわと踊る紙をつかめるわけもない。
無慈悲にもそこら中に散らばってしまった。
そろり、と視線を上げると、止まったままの指揮棒が目に入る。それだけでも罪悪感で胃が痛いのに、非常に不機嫌な顔をした指揮者が深いため息を吐いた。
麻子は慌てて頭を下げる。
目についた楽譜から集めていくが残り一枚がみつからない。泣きそうになりながら譜面台下をどかすと、隣から最後の楽譜が差し出された。
「はい。どうぞ」
彼の言葉はすこし笑いを含んでいた。
楽譜に添えられた指が長く綺麗で思わず手が震える。
「すいません」
麻子が緊張しながら楽譜を受け取ると、彼はとんとんと指先で二回膝を叩いてクラリネットを左膝の上に立てる。
「川田さん、また楽譜飛ばしたね」
さらに頬がほてるのを感じながら麻子は視線をずらした。

「根井先輩！　意地悪いこと言わないでください」
照れた笑みで、彼を見ると……、
見ると……。

土曜日。一般的では休みとなる本日も学校の先生という職業においては、ただの勤務日でしかない。生徒たちも半日授業で、この学校の在校生だった時分は無くなればいいのにと思っていた。まぁ、いまも思っていることに変わりはないが。
寝不足の頭で業務をこなしながら、麻子はそっと自分の頬に触れる。
昼休みの職員室は暖房がつけられているせいで少し乾燥していた。
肌のコンディションとしてはそこそこだ。
教師という不規則な生活を送っているからこそ肌のケアはしっかり気をつけていた。が、おでこに一つできたニキビ（というより歳的には吹き出物ともいうが認めない）が切ない。
――いや、そうじゃなくて……
久々に見た夢の内容がひどかった。いや、ひどかったのか、幸せだったのか。
夢の中の私は、不注意で楽譜を飛ばすような女の子だったし、ふてくされた言葉を使っても痛々しくないお年頃だった。明るい音楽室と風で膨らんだ白いカーテンがとても美しくて、微笑む先輩の顔もすごく愛おしかった。
それに加えて先輩の仕草。もう思い出すことすらなかったのにそのままだった。指でクラリネットを叩く癖も、必ず左膝に置くことも。笑うときに小首をかしげるのも、そのときに少し左に傾いているという癖もそっくりだった。
麻子は無意識に頬をつねる。
今朝の夢は美しかったし、愛おしかった。
だから満面の笑みを浮かべたまま目が覚めて「ああ、夢だったんだ」と思ったとき、ひどく泣きそうになった。その夢の続きが見たくて無意識に目をつぶってしまった。
それがなんだか少し、くやしい。
高校を卒業してから何度か恋も経験した。あの時よりずっと濃密で、いわゆる大人な恋愛だってしてきた。いまだって付き合って二年になる彼氏だっている。
もう二十七にもなるし、この人と結婚するんだろうなとも考えている。
だからこそ、このタイミングで見てしまったのが後ろめたい。
「どっちが想いつつ寝たんだか……」

はぁ、と麻子はため息を吐いた。
冷えきったコーヒーを飲み干して席を立つ。と、後ろから声がかかった。振り向くと同僚でもあり恋人の木村友和だ。今はこっちの都合で少し気まずい。
「あさ、川田先生」
「なんですか、木村先生」
呼びかけた名前を咎めるように軽く睨むと、彼は小さく笑って肩をすくめた。
「明日の一時から来客予定なので対応をお願いしたい、と校長が。どうも元吹奏楽部員らしい。来年に公演していただくみたいで、その下見と思い出の学校巡りをしたいって言ってるみたい。忙しいらしくて明日しか来れないんだってさ」
「えー、日曜も学校来なきゃいけないのかぁ……」
「俺が変わってやれればいいけど、こうやって指名されたらできないもんなぁ。校長も仕事の振り方が雑なんだよ」
友和が小声で文句を漏らす。麻子は同意を示しつつ、小さく笑った。
「ありがとう、わかった。案内すればいいのね？」
「ああ」
「名前は？」
「確か……、ああ、根井健太郎さん。この前、ニュースサイトにも載ってたよな」
「……えっ」
ぎょっ、とした顔をしたのだろう。
彼の不思議そうな目を見て、麻子は思わず口元を覆った。
それでも動悸と泳ぐ視線は止められそうにない。
――勘弁してよ。なんでいまこのタイミングで。
「え、どうした？　なんか仲良くなかったとか？」
「……ううん、なんでもない。思ったより知り合いで驚いた」
動揺を隠すため、麻子は空のマグにコーヒーを注ぐ。震える指先がバレぬように一旦近くの机に置いてから彼のほうを向いた。
「ちょうど一つ上の先輩で同じ楽器を吹いていたのよ。私が楽器を吹けるようになったのは、その人のおかげだったから……。卒業後は何しているかも知らなかったし、本当に驚いたの」
嘘は言っていない。
根井先輩はクラリネットの基礎を教えてくれた人だ。クラリネットの中でも一緒のメロディを吹いたり、動きをしたりすることが多かったから、よく付きっ切りで教えてもらっていた。嘘は、言っていない。重要なことも言っていないけれど。

「そうだったのか。それは運命的な出会いだなぁ」
友和の言葉に、麻子は苦笑で返した。
良くも悪くも感情の機微に疎い、彼らしい言葉だ。ちょっと考えを回せば可能性に勘付きそうなものだし、皮肉にも取れる言葉だ。だが彼の場合は、本心からの素直な感想なのだ。麻子自身、救われる部分もあるし交際を始めるきっかけにもなったのだが――、時折危うい。
職場での交際がバレたのも、生徒の間でまことしやかに噂が出回ってしまう致命的ミスを犯したのも友和だった。
それ以来、学校でデート先の話や麻子との会話についての話題を話すときは、二度は脳みそで考えてから言う。といった不名誉な約束事がある。今年の春に起きたホームルーム事件も忘れてはいない。噂を否定するのも少々無理が出てきた。
「明日はテスト前で部活も活動がないし、三年生が勉強しにくる自習室以外だったら見学もしやすいだろうな。まあ、生徒も受験前で切羽詰まってるから気にする余裕もないだろ」
「そうね。たぶん教室棟と部活棟が中心になると思う」
「それから、明日の夜……」と友和が続けようとすると、職員室の入り口から声がかかった。公私混同の内容だったのだろう、彼が慌てて口をつぐむ。
「一年一組の奥田勇太です。木村先生に課題を提出しに来ました」
入ってもよろしいですか、と尋ねる声に友和が返事をした。
麻子も知っている生徒だ。受け持っている軽音学部の新入部員で、よく練習しに来ていた。微笑みかけると彼から会釈が返ってくる。噂好きな生徒ではないけれど、タイミングを見計らって友和からは距離を取っておいた。
「じゃあ、校長には私から了承の返事を出しておきますね」
友和に言い置いて、少し冷めてしまったマグを抱え席に戻る。
戻って椅子に座り、思わずこめかみを抑えた。頭が痛い。
（本当に、どっちが想っていたんだか分からなくなってきちゃった）
明日の波乱の予感を察知して、麻子は深いため息を吐いた。

＊

根井先輩、こと根井健太郎は、なんだか浮世離れした

不思議な人だった。
初めて会ったのは、部活動の見学の時だったと思う。音楽準備室で、防音のためのカーペットの床に正座をして楽譜を読んでいた。「こんにちは」と声をかけると、ワンテンポずれて返事が返ってくる。彼の寡黙ながらも歓迎するような、穏やかな笑みに恋心を思いっきり射貫かれた。一目ぼれは先にも後にもそれっきりだ。
後からはなんとでも言えるし、あの頃の自分は全否定をするだろうけれど。思春期を迎えて子供から脱却したい自分の前に、分かりやすく大人な人が現れて舞い上がったのだろう。今思っても、あれ以上はないほど熱烈な恋だった。
それからは怒涛の追っかけだった。よくもまあ、そんな行動力を隠し持ってたわねと当時の友人には言われるほどに、毎日毎日、飽きずに彼を追いかけた。
朝は早起きして彼が来る時間に合わせた。学校につけば、廊下ですれ違わないかとそればかりを願っていたし、誰かが二年の階に用事があれば付いていった。
放課後の部活にも力を入れたし、帰り仕度が早い先輩を追っかけて猛ダッシュし、靴箱で会えるように工作していた。随分と見た目にも気を遣うようになった。
ちょっとずつ、先輩に近づけるようにと努力をしていた。
まだそれほど携帯が普及していなかった時代だ。学校でしか話せなかったし、会話でしか趣味や好みを知ることができなかったからたくさん話しかけた。人見知りの先輩から返ってくる言葉はとても少なかったけれど、彼の言葉に一喜一憂していた。
――先輩から見た私は健気だったのか、暑苦しかったのか。
はたして、どっちだったのかしら。
麻子は土曜授業終りの教室の施錠をして回りつつ、老朽化はすれど変わらない校舎で過ごした日々に想いを馳せていた。
この学校に赴任が決まった当初は色々と思い出すことも多かったのだが、一か月もしないうちに仕事に追われ、そんな時間も無くなった。当時過ごしていた教室を見ても、脳裏に浮かぶのはかつての級友でなく、現在在籍する生徒たちの顔だ。
ただ、今だけは。
友人たちと駆け回ったベランダや、かつて使っていた教室やロッカー。休み時間に恋バナや冗談を言い合って笑い転げていたベンチ。マラソン大会でどさくさに紛れて声援を送った運動場。一緒に歩いた駐輪場までの道。先輩が通るのを待っていた実験棟への通路。必ず金曜二限にある先輩のクラスの化学の授業、その教室が見える

特等席の窓。校舎のあちこちに小さな落書きも残っているはずだ。

「あの頃は毎日のように笑っていたなぁ」

そういえばここの落書きはまだ残っているかしら、と階段の裏側を覗く。

「うわぁ、ずいぶん増えてる……」

かつてはまだ余白の残っていた壁も、時を経るごとに増えた落書きで埋まってしまっていた。時代を超えても変わらない、かわいらしいイラストや名前、相合傘に思わず笑みが零れる。高校時代のかすかな記憶を掘り起こしながら、そっと壁に指を這わせた。

——あ、見つけた。

書かれていた文字に麻子は思わず笑ってしまう。

バレぬようにと、わざと歪ませた筆跡で書いてある「根井麻子」が今更ながら恥ずかしい。

「消したほうがいいかなぁ……。でも十年も残ってたら、そのままにしていたいような……」

高校生の頃は友和に会ってないからセーフか？

結局、落書きはそのままにして歩き出した。

十年前のことだし、若気の至りだし。今後、この話が彼と私の間で話されることはないだろうから許されたいなぁ。言いわけをツラツラと考えながら階段を上る。

階段の踊り場に差し掛かって、手すりに手をかけ、遠心力でグルっと体を反転させた。

過去に想いを馳せていたからだろうか。無意識に取った子供のような行動に苦笑いした。

「だめよ、麻子。浮かれちゃダメ」

大きくため息を吐いて、次の教室に足を向ける。

まだ二階の教室の施錠がまるまる残っていた。普段に比べて格段に時間がかかっていることに、認めたくない何かを感じる。気付いてしまえば最後の、友和に対してとても申し訳ないような、そんな感情。

チカチカと脳裏によぎる青春の欠片を追い払って、麻子は鍵を差し込んだ。

*

日曜日に出勤すると部活もない日というのもあって、来ている教師はわずかだった。

三年生を受け持つ担任教諭が数人と、それから麻子。大学受験を控えた生徒の指導のため、三年の担任たちはしばらくすると自習室や進路相談室へと移動していく。大量のファイルを抱えて歩く背中は、ぐっと疲れて見えた。それはそうだろう。鮮やかな赤い問題集が壁一面に並べられた空間で、問題の添削や提出する重要書類のチェック、生徒のメンタルケア、それぞれの進路選択の

最終決定とマルチタスクを行わなければならないのだ。少なくとも二人ほど、この時期まで音楽にのめり込んでいる軽音楽部の生徒を知っているため三年の担任の大変さが身に染みる。本当に頭が下がる。

誰もいなくなってしまった職員室で麻子は大きく伸びをした。

時計は十一時を指している。昼までに小テストの採点をして、午後は先輩が来るまで明日の雑務をこなしておきたい。終われば明日は少し楽になる。

髪をかき上げて髪留めで結ぶと、麻子はペンを取った。

「川田先生、お客様です」

その声を聞いて麻子は弾かれたように顔を上げた。

慌てて時計を見ると約束の時間より少し早いくらいだ。「今行きます」と返事をして鏡を覗き込んだ。特にメイクが崩れているところはないようだ。軽く口紅だけを引きなおして立ち上がった。

はやる気持ちを抑えながら廊下を進む。

途中で教室の窓を使って自分の姿をチェックした。白いニットに、ざっくりと編んであるカーディガン。お気に入りの紺のフレアスカートと、おろしたばかりのストッキング。一通り見て、麻子は指先に視線を落とした。昨日整えたばかりの爪は寒さのためか少し赤くなっている。

来客用玄関まであと数メートル、というところで麻子は足を止めた。

そっと、冷えた指先を首に当てる。

舞い上がる気持ちを抑えるためか、正気を取り戻すためか、単に指先を温めるためなのか。じんわりと熱を指先に移しながら、ゆっくりと息を吸った。

薬指の指輪が異様に冷たい。

麻子は首から手を外して、背筋を伸ばすと歩き出した。

ドキドキしながら玄関を覗くと、記憶していたよりも背の高い男性の姿が見える。こちらが声をかけようとすると、彼はそれよりも先に軽く頭を下げた。麻子は思わず、ふ、と笑いが漏れる。相変わらず少し左に傾いていた。

学生服ではなく、スーツ姿だが変わらない佇まいが懐かしい。

根井の上げた視線が麻子をとらえると、彼も笑みを浮かべた。

「お久しぶりです」

麻子が話しかけると、根井は軽くうなずいた。

「本当に、久しぶり」

「はい。卒業されてから会ってないですよね？　もう、」

卒業するときの年齢が十八歳だから……、と麻子が指を使って数えていると根井が笑って数字を付け加えた。

「もう、十年になるね」
麻子は恥ずかしくなって、数えていた手をパッと開いた。
「あ、でもニュース拝見しましたよ。受賞おめでとうございます」
「うん。ありがとう。あまり知られてないんだけど……、沢山の人に祝ってもらえて、うれしい」
「知られてない？　あ、賞自体がですか？」
麻子が質問をすると、根井は驚いたような顔をした。
「うん。賞もだし、自分が助教になっていることも、だね」
「なるほど。確かに小難しい名前の賞でしたもんね」
そこで根井は堪えられないというように噴き出す。
「相変わらずだね」
「え？」
「相変わらず、僕の話のフォローが上手いね。今の間合い。懐かしかった」
「そうでしたっけ？」
「うん。よく助けてくれた」
「確かに。口下手で、ずっと無口な先輩でしたもんね」
麻子が笑うと、根井はむっとした顔をする。その表情が懐かしくて、さらに笑みが深まるのを隠すため麻子は左手で口を覆った。
それを見て、根井は「あ……」と声を漏らす。
「もしかして名前変わった？」
唐突の質問に麻子が困惑すると、
「左手」と、彼が指を差す。麻子が左手をみると「指輪」とさらに単語が加わった。
そこでようやく合点がいく。
「ああ、結婚はまだです。名前は変わってませんよ」
「そっか。じゃあ川田さんだ」
「でも先輩は人の名前なんてめったに呼ばないじゃないですか」
「しつれいだなぁ。呼ぶよ」
「話しかけるときはいっつも、『ねぇ』とか『あの』でしたよ」
麻子が挑発的に根井を見ると、ばちりと視線があった。子供じみた言い合いが急に恥ずかしくなって会話を切り上げる。麻子は視線を外して根井に入校許可証を差し出した。
「これ、ぶら下げておいてください。今日はどこを回られますか？」
「うーん、じゃあ部室で」
「講演されるところは体育館ですよね？　先に行かなくていいですか？」
根井は笑って頷いた。
「古いまま？」

「私たちの頃と変わってませんよ。床が張り替えられたくらいです」
　歩き出した麻子の隣に付いていきながら、根井は廊下を見渡した。
「校舎も変わってない。教室棟は？」
「そっちは変わりましたよ。なんと廊下が雨の日でも滑らなくなりました。私が赴任する前の年に変わったんですけど、本当にありがたかったです」
「大変だったもんね」
　数年前の教室棟の廊下は、雨の日になると湿気のせいで危険なほど滑る場所だった。そういった言葉に敏感な三年生でさえ逃れることはできず。皆が諦めていたし、実際、友人が面白いように滑っていくの腹を抱えて笑っていた。「あー、滑った！」という友人に近づくと足を掴まれて一蓮托生にされることもあった。
「名物だったんですけどね」
「滑った？」
「私ですか？　友人に無理やり滑らされたくちです。でも、大学にはちゃんとストレートで受かりましたよ。先輩は？」
「廊下で滑ったことないよ」
　でも？　と麻子が続ける。根井は目を細めた。
「もちろん、大学はちゃんと受かりました」
「それを難関大の人がいうと嫌味ですねぇ」
　麻子が笑うと根井は手をぱちぱちと打ち鳴らした。
「院までいって、助教になったっていえば？」「うわっ、最低！」
　大袈裟に麻子がのけぞると、根井は声を上げて笑った。
　吹奏楽部の部室に着くと、麻子はカーテンを開け放った。
「どうですか、懐かしいです？」
　差し込んだ陽の光に彼は目をつぶった。
「眩しい、あったかい」
　その光景に既視感を覚えて、麻子は動きを止める。
「……でしょうね。なんだか先輩がそこに立ってるだけで、高校生に戻ったような気になっちゃいます。よく正座しながらクラの手入れしてましたよね」
「うん。君とお菓子の話をしながらキーに油差したり、スワブ通したりしたね」
「スワブ！　懐かしいなぁ。お菓子、あの頃なにが好きでしたっけ？」
　麻子は首を傾げた。
「ミルフィーユ、好きだったよね」
「たしか……、先輩はオペラが好きって言ってませんでした？」
「近くの……、あの、ケーキ屋さん。なんだっけ？」

「もしかして、ヤマウチさんですか？」
二人は顔を見合わせて、ああ、とうなずき合った。どちらが美味しいか、というくだらない理由で口喧嘩をしたこともある。後日、そのケーキ屋さんでお互いのオススメを買って帰って、結局どちらも美味しいという結論がついた。
――なんて幸せだったのだろう。
そうだ。じゃあさっきの既視感はおそらく、土日の昼休憩の光景だ。
「先輩はカーテンの中に入って、外見てましたよね？」
「そうだっけ」
「冬になるとよく日なたにいましたよ。あったかいって言いながら」
「あ、もしかして金木犀の話？」
「金木犀？　私が覚えているのは二人か、三人で……、いや、たぶんクラの皆で課題曲を口笛で吹きながらセッションしたことですね。そしたら、先輩がカーテンから出てきて参加し始めたんですよ。先輩が何食わぬ顔で参加するもんだから、シュールで面白くて、みんな笑っちゃったんです」
麻子が思い出し笑いをすると、彼は口の右端だけを引き上げた。これは彼がムッとしている癖だ。これも昔取った杵柄、といってもいいだろうか。先輩に対する観察力は衰えていないようだ。
「金木犀、覚えてないのはずるい」
麻子は目を瞬いた。
「え、金木犀ってなんですか？　何か私いいましたっけ」
「金木犀の花言葉。教えてくれたでしょ？」
根井は窓のほうに歩いていって、アレと外を指さした。
「あそこに生えてる木」
「ええ、いつですか」
「星玲祭くらいのとき。あの木の花言葉を知ってますかって」
そう返されて、麻子は呆然と根井の顔を見た。
――本当に覚えがない。
「そんなロマンチックなこと、私言いました？」
「うん」
嬉しかったよ、と静かに笑う顔が寂しそうに見えた。
「僕が卒業する年の秋、ここから二人で見てたんだ」
根井は麻子の瞳をじっと見つめた。
「臆病だったから、ちゃんと伝えられなかったし、それでいいかなって思ってた。あんなに君に慕ってもらえて、綺麗な思い出で終わってよかったって。でも、その花言葉を教えてもらってから、秋が来るたびに思い出して、いま、どうしているだろうかって、それで今日は、」
少しずつ言葉を重ねていく根井に、麻子はとっさに距

離を取った。
「先輩、変わりましたね。あの頃はそんな風に喋ってくれなかったじゃないですか」
——ああ、まずい。
彼から目を逸らせば、色々なものが飛び込んでくる。
自分たちも使っていた楽器や、棚、使い込まれた楽譜。銅賞から金賞まで様々な賞状たち、色褪せた集合写真、乱雑に置かれた楽譜の束、端が毛羽立つほど読み込まれたスコアブックに、カラフルな書き込み。防音のために壁際に積み上げられた毛布、本番までの日数をカウントされた黒板、風でなびく真っ白のカーテン。
窓際にたたずむ、先輩の姿。
その空間にあるすべてが〝あの日〟に引きずり戻そうとしていた。
「うん、変わったよ。お互いに」
根井はそう言って黙った。
麻子はどこまでも静かに息を吐き出す。
ここが、ギリギリのラインだ。越えれば初恋が叶い、代わりに友和を失ってしまう。先輩の言葉が嬉しくないわけではない。正直ドキドキしてる。——だけど。
傷ついた友和の顔が浮かぶ。それから、双方の両親の顔も。
二人で決めた部屋も、おそろいの食器もある。結婚式の大まかな日取りだって決めてある。今夜、デートするお店の予約も取っている。麻子は泣きそうになった。
もう、子供じゃない。
二十七歳になって、結婚も控えていて、愛してくれる人もいる。
彼らを振り切っていく勇気もないし、その後の煩雑なやり取りや世間からの白い目が想像できないほど子供ではない。かつて、先輩しか見えていなかった私はもういない。
しかし間髪入れずに断れなかったことが、悔しい。
「……わたし、」
麻子が震えるくちびるを動かすと、彼が遮った。
「ずるかったね」
根井は首から許可証を外して、麻子に渡す。
とっさに顔を上げると思ったより近くに彼が立っていた。
ほのかに体温が感じられるような、微かに服がこすれるような距離。
高校の頃のふたりの距離だった。
「ずるかったね」って何が。私が？　彼が？　それとも別の、過去の私たちが？
問い詰めるために口を開いて、もう、その間合いは許されないことに気づいた。

麻子は唇を噛みしめる。
言葉足らずの先輩をフォローするのが好きだったのに。十年経っても、その間合いを許してくれたの嬉しかったのに。勝手に引き金引いたのは先輩の方だったのに。
――いま、一番ずるいのは、貴方なのに。
でも、何も言えずに麻子は黙った。
ふたつ、瞬きをするほどの時間だっただろうか。根井が一歩、後ろに引いた。
「体育館はいいや。校舎の見学もいい」
「でも、」
「僕が体調、崩したとでも言って。ごめん」
麻子は受け取った許可証の紐をきつく握ると、なんとか首を縦に振った。
彼はそれをみて、気まずそうに太ももを数回叩く。そして困ったように笑って言った。
「また、忘れなきゃいけないね」

――かつて、私は燃えるように寂しい恋をした。
誰もいなくなった部室で、麻子は床に座り込んでいた。ストッキング越しに感じるカーペットのごわついた固い質感がなんとも懐かしい。
ああ、そうだった。あの人は見た目の穏やかさに反して、時折、容赦なく核心をつく言葉を吐くのだ。そこは変わってなかった。むしろ進化していた。
彼があくまでも穏やかに引いた引き金と、撃ち込まれた言葉に胸が張り裂けそうだ。
麻子は俯いたまま、じっと床を見る。
いま、少しでも動けば涙が溢れそうだった。
たちの悪い爆弾を抱えて、麻子は必死に息を吸った。
さみしい、と口にしてしまいそうだった。
十年前、高校生だった私たちはここで生きていた。確かに、ここで、この古い校舎のなかで必死に生きていた。今はもういなくとも、頭や胸の中にいつだって生きている。
景色の中にいる。どこにいっても、私たちがいた匂いと景色がある。
思い出して、忘れて、塗り替えて。そういった事を繰り返して、思い出を忘れながら、思い出を作りながら、ゆっくりと年を重ねてきた。
「それがどうして、今になって」
あえぐように息を吸った。
もう二度と、まったく同じ時間を繰り返すことはないのに、どうして。

「どうして、こんなに……っ」
足の方から震えが駆けあがってきて、たまらなくなった。
後ろ姿を追いかけて廊下を走ることもない、ふざけて背を押すこともない、歩幅を合わせることもない、笑いあうこともない、怒ることもない、私の隣に彼はいない。
その立ち位置には別の人が、友和がいる。

こぼれ落ちる涙をそのままに麻子は立ち上がった。
窓に近づいて金木犀の木を見た。花が無いから見分けられないが、駐輪場の前にある木だろうか。麻子はじっと記憶を探った。金木犀の花言葉。かつて私が言った言葉。
思い出すことができずに、麻子は諦めて視線を窓枠に落とす。
ふと、引っ掻き傷の落書きが目に留まった。
思わず笑いが漏れて、弾みで涙も転がり落ちる。
「こんなところにもあったんだ」
〝永遠の初恋〟と書かれた落書きを指先でなぞった。
こっちの言葉ならちゃんと憶えがある。
ならば、忘れていたのは先輩の方だ。
永遠の初恋を花言葉にもつのは、金木犀ではなくて銀木犀。小さく白い花で、控えめな柔らかい香りを放つことから、『初恋』『高潔』という花言葉になったはずだ。
なんてロマンチックな落書きだろうか。
頬の涙をぬぐって麻子は笑う。
笑いながら、小さな予感にも似た確信が芽生えた。おそらく、先輩にもあるだろう。
今はなくとも、きっと気付く日がくる。
十年後、きっと今日のことを憶えている。さっきまでの私達のように思い出して、忘れられずに苦しむ日がくる。二十年前になる高校生の時のことはどうだろうか。
ちゃんと憶えているかな。――まあ、でも、
少しずつ、また忘れていくのだろう。
高校生の頃、二人で話題にしていたケーキ屋、使っていたリードの番号、流行っていた言葉、自分の楽器につけた名前、着ていたセーターの色、最寄りのバス停の名前、大切な花言葉を忘れてしまったように。
私が一生懸命選んだ服や彼のネクタイの色、交わした会話の内容、落書きの場所、泣いた理由、それから表情や声、互いの癖をきっと少しずつ忘れるのだろう。
十年、二十年、三十年とゆっくり時間をかけて忘れていって。
そして、同じ時間をかけてゆっくりと上書きしていくのだろう。

私は友和と、
彼は私の知らない人と、
好きなケーキの違いで口喧嘩をして
金木犀や銀木犀を見上げて
カーテンの中で会話して
へたくそな口笛でセッションして
くだらないことで競争して
想いを伝えられなくてやきもきして
後ろ姿を追いかけて全速力で走って
寒さに互いの温もりを知って
桜並木を歩いて
花火や祭りを楽しんで
秋の夕暮れに時の速さを感じて
笑いあって
泣いて
時折、忘れられない誰かのことを思いながら。それでも決して言わずに、小さな未練を抱いて私は友和と過ごすのだろう。新しく思い出を作るのだろう。

私はそれが「さみしい」というのだと
きっと、また何度でも思い知る。

＊

麻子はカーテンを閉めて教室を出た。
職員室で温かい紅茶を飲んで、化粧を直しながら、友和にメッセージを送ろう。
『休日出勤まじで疲れた。褒めて』って。
友和はきっと何も訊かずに『頑張った』と返してくれるはず。それから、来年の春に挙げる結婚式について話そう。使う予定だった吹奏楽アレンジの曲はリストから消してもらって、あと、出来る事なら小さくて白い花も当分の間は見たくない。
くだらない我儘も、きっと笑いながら許してくれる。
その優しさに甘えきって「ごめん」と今日のことを謝るのは、十年後でも許してくれるだろうか。

創作ノート
【テーマ】
高校を舞台にして、様々な人が「今」という一瞬を大切に生きている小説を書く。

【題名について】
短編集は題名を決めてから書かれた。

題名はすべてラテン語の文章から引用。今は話者のいなくなった死語だが、現代を舞台にした小説で使用することによって、新しい意味やイメージに繋げたいと思った。

☆あとは単純にラテン語が好きだったから。

短い単語でありながら沢山の情報とロマンが詰まっていて、話者はいなくとも文章語としてなお生きているラテン語。なんだかかっこいいですよね。

題名「Carpe diem」カルペ ディエム

「何気ない一日一日を愛おしむように生きよ」

ローマの詩人ホラティウスの詩『Carm.1.11』からの一文。

Carpeは「(花を) 摘む」という意味を持ち、その目的語としてバラや花を連想したところにdiem（日）が置かれる。日＝花というイメージの重なりから「何気ない日々を花を一本一本愛おしむように生きよ」という意味になる。

☆登場人物たちにとって一生の思い出となってしまう青春の日々を書こうと、この言葉をみて思いつきました。「今」という一瞬を忘れられず、そして時とともに美化しながら生きていくのだろうと思います。

春の章「Dum spiro, spero」ドゥム スピーロー スペーロー

「息をするかぎり希望を持つ」

☆音の響きが美しい文章です。おそらく本来は「生きよ。希望はある」という前向きな意味で捉えるのだろうが、私は「生きていると、どうしても希望が湧いてしまう」という後ろ向きな意味で小説を書きました。

夏の章「Nunc omnia rident」ヌンク オムニア リーデント

「いまこの世の全てが笑っている」

ウェルギリウスの『牧歌』にある表現。

☆「いまこの世の全て」としたのは私の意訳です。

世界が笑うという表現から夏を連想しました。そして、一番はじけるような笑い声と言えば高校二年生の夏だったなと思うのです。はじけるように幸せな恋の物語にしました。

秋の章「Tu, mihi sola places : placeam tibi, solus」トゥ ミヒ ソーラ プラケース プラケアム ティビ ソールス

「僕を喜ばせるのは君だけだ。君を喜ばせるのは僕だけでありたいんだ」

ローマの恋愛詩人プロペルティウス『Eleries』の一文。

本来はキュンティアという女性の名前が入る。
☆短い文章のなかに二人の関係性、独占欲、祈りが滲んでいて一目惚れでした。
秋の少女たちの淡い恋を書きたいと思いました。

冬の章「Vale et memento mei」ワレ エト メメントー メイ
「さようなら。私を忘れないで」
☆この言葉のために短編の全てを書いた、といっても過言でないと思います。忘れたくないと誓った一瞬でも、いつか忘れてしまう時がくる。思い出すことも忘れてしまう時がくる。その切なさを書こうと思いました。現在二十二歳の私の気持ちを一番表現している文章です。人や場所や時間に別れを告げるのは私だけれど忘れてほしくない。そういったエゴがこの小説を生みました。

以下、題名を春夏秋冬で省略する。

【登場人物・舞台設定】
この連作短編集に登場する人々・舞台は全作共通にした。春の章での脇役が、別の章で主人公になっていたりしている。また逆に主人公が脇役になったりすることもある。有川浩著『阪急電車』のような形を目指した。別の視点や、さまざまな人との関わりによって情報を増やし、深みのある人物描写をする狙いがあった。登場人物が多いため、主要キャラクターの説明と脇役として登場するキャラの名前を書いておく。

【舞台】
北高校。平均的な偏差値の普通科と、理系特化のサイエンス科がある。
クラスは1組から7組まで。文系クラスは1から3組。理系クラスは5から7組。4組は短大や就職を目指すクラス。特進クラスはそれぞれ1組と7組。
教室棟と理科・家庭科などの教室と職員室のある管理棟、理系やサイエンス科の使用する実験棟に分かれている。武道場、体育館、プール、運動場、テニスコート。屋上は立ち入り自由。外階段からのぼることができるが、コンクリートうちっぱなしで掃除していないため来る人はすくない。
文化祭と体育祭が一緒に開催される。名称は星玲祭。

【登場人物】
春
主人公　奥田勇太

高校一年生。人と話すことが苦手で、疎外感を感じている。友達をうまく作れず、将来に漠然とした不安を抱いている。ある出来事がきっかけで「美しさ」に傾倒するようになる。好きな文豪は太宰治。音楽ギークでなんでも聴いている。インディーズバントに詳しい。

☆ことごとくタイミングが悪い子で書いていて可哀想になりました。勇太はとても感受性が強い子なのでこの先も難儀しそうです。はやく理解者に合わせてあげたい。

共通登場人物

屋上の女の子・井原夕莉（秋）国語教諭・川田麻子（冬）

担任・木村友和（冬）

夏

主人公　白石日奈

高校二年生。理系の五組。お人好しで、クラスの皆とはしゃぐのが好き。スカートは一回折派、コンシーラーと色付きリップ程度の化粧をしている。

文化祭の実行委員として、疎遠になっていた成瀬と話すようになり、また恋をしている。

☆これぞ女子高生って感じの子にしました。いわゆる文化祭マジックにかかるので、三か月後に一波乱ありそうだなと思いながら、甘酸っぱい恋愛シーンを書きました。書いていて本当に楽しかったです。

共通登場人物

実行委員の先輩・佐藤愛美（秋）

秋

主人公　井原夕莉

地元では有名なバンドに所属している。ピンクのギターストラップが目印。ギターもそこらの大学生よりは格段にうまく、別のバンドのヘルプに入ることもある。美人。

才能という点においては、天才になれない努力家タイプ。

屋上でギターを弾いていたら偶然にも、勇太の自殺を止めることになった。

☆夕莉は愛美のことがとても好きだという設定でした。好きという言葉ではなく、表情や仕草、会話でいかに表現するかというところに力を入れました。夕莉本人もはっきりと明言させず「友人として」なのか「恋愛として」なのかは読者に決めてもらえたらという思いで書いています。

佐藤愛美

夕利の友人。アコースティックギターを使って弾き語りをしている。人を惹きつける才能があり、その歌や

歌声は人の心に刺さる。夏の主人公、日奈の知り合い。

共通登場人物

軽音部の後輩・奥田勇太（春）　顧問・川田麻子（冬）

冬

主人公　川田麻子

国語教諭。二十七歳。同僚の木村友和と婚約している。

来年の春に結婚予定。

夕莉たち軽音部の顧問。忘れられない初恋の人がいる。

☆二十七歳ということで想像しながら書きました。光原先生に「あー、あるよね」とおっしゃっていただけるのが嬉しかったです。私の理想の姿を書きました。

根井健太郎

大学の助教。素粒子物理学　素粒子実験領域を研究している。麻子の初恋相手。

☆研究分野においては間違っている場合もあるのでご容赦ください。

好みを詰め込んだ男性だったので、書いていてとても楽しかったです。

共通登場人物

職員室の生徒・奥田勇太（春）　軽音部の三年生・井原夕莉　佐藤愛美（秋）

【各作品の解説】

春

・「美しさに内容なんてあってたまるか。美しさはいつも無意味で無道徳だ。」

太宰治著『太宰治全集2』1998年9月27日　㈱筑摩書房　198ｐ8行目

・バタフライエフェクト（バタフライ効果）

初期条件の微かな差が、その結果に大きな違いを生むこと。蝶が羽を動かすだけで遠くの気象が変化するという意味の気象用語。（大辞林）

・勇太をとめるきっかけになったコードCM7

独特の不協和音がするが、作曲には欠かせない音。ギターを弾いていた「趣味の悪いショッキングピンクのストラップ」の子は井原夕莉（秋）で、秋の章の伏線にしています。

夏

・星玲祭は私の母校の文化祭「星琳祭」を真似しました。

・バンド「メルトフィラメント」の元ネタは「溶けた電球」という実際にあるバンド。

秋

・愛美「ちょっとだけでいいから可愛いセーラー服とか……」

この部分は「けいおん」平沢唯のことです。
・インスト（25ｐ）インストゥルメンタル。和製英語で楽器だけの曲。歌詞のない曲。
・夕莉が「一瞬でもいいから動きを止めてしまうような演奏をしたかった」という部分が、春の章で勇太の自殺を知らず知らずのうちに止めているという部分の伏線回収にしてい
・『記念撮影』BUMP OF CHICKEN の曲　https://youtu.be/2WY1wrwpd3k
冬
・日本物理協会　若手奨励賞（素粒子実験領域）　実在する賞から借りてきました。
・スワブ　楽器の内部を掃除するために、重りを付けた布。

題名について参考にしたサイト
「山下太郎のラテン語入門」　https://www.kitashitakawa.jp/taro/

【おわりに】
この小説は、意図せず大学で書いた小説たちをブラッシュアップする形になりました。
春の情景描写は光原先生の文芸創作の課題を思い出し、夏のテンポを意識した会話は有川浩さんを意識して練習していたものです。秋は三年の研究発表で執筆した「今日は200ｇ重い」や金沢フィールドワークで取り組んだ曲についての表現を取り入れています。
また、春から秋に進むにつれて登場人物の学年が上がっていき、最終章は私の現在の年齢を越えていくようにしました。四季を一つずつ越えながら生きていく。という意味を※て、小説の終りは次の季節へと繋がっている描写をしています。
春夏秋のストーリーには私の高校時代の思い出たちを。冬の章では川田先生のようになっていたいという願い、そして社会人への一種の諦めを織り交ぜつつ書きました。
数年後の答え合わせが楽しみです。
こうして振り返ってみると「Carpe diem」という言葉に惹かれ、タイトルとして付けたのは、四年間の大学生生活に対する私の想いなのかなと思います。
とても美しく、愛おしい、学びある日々でした。

最後に。
毎日ギリギリに滑り込む原稿や支離滅裂なポエムを、細かくチェックしてくださった上に嬉しい感想をたくさんくださった光原先生。執筆中は、ほぼ毎日終バス

まで一緒にパソコンの前で、翠明館のテーブルで、呻いていた光原ゼミ生。相談に乗ってくれた友達。小説を楽しみにしてくれていた友達。すべての人に感謝を。本当にありがとうございました。
Quam gaudeo, ah vivere mihi nunc lubet.

—ひゃくたけ・あやか　２０１８年度度卒業生—

『尾道市立大学日本文学論叢』第12号目次（平成28年12月）

特別寄稿

文化資源としての人と文学
―小泉八雲をめぐって―　小泉　凡

創作

傾城不問語　香川莉歩子

水　日名子紗綾

研究論文

近現代における呼びかけ語「姫」の変遷
―シェイクスピア翻訳を中心に―　新岡　直美

『とりかへばや物語』左大臣家の繁栄
―作品成立背景をめぐって―　東　滋実

〔翻刻〕『義烈百人一首』　小松　春菜
田口智恵美
藤川　功和

愛媛県松山市興居島の和気姫伝説と河野家　肥田　伊織

谷崎潤一郎「春琴抄」論　山田　麻美

坂口安吾「堕落論」論
―武士道をめぐって―　原　卓史

平成二十七年度卒業論文・修士論文題目

平成二十七年度三年生・院生研究発表会発表題目

彙報